

使徒の働き10章1－23節 「異邦人宣教の始まり」

1A 主を求める異邦人 1－8

1B 異邦人の町 1－2

2B 聞かれている祈り 3－4

3B 人の派遣 5－8

2A ペテロへの指示 9－16

1B 祈りの時間の幻 9－10

2B 食物規定で汚れた動物 11－12

3B 命令を拒むペテロ 13－16

3A 使者の受け入れ 17－23

1B 御霊への従順 17－20

2B 異邦人の受け入れ 21－23

本文

使徒の働き 10 章を開いてください。私たちは今、8 章から 12 章までの間にある、異邦人への宣教の過渡期のところを見えています。神は、アブラハムを召され、イスラエルの国民を造られました。そして、イスラエルによって、すべての国民が祝福を受けるようにされていました。主イエスは、失われたイスラエル人のために来られましたが、使徒たちに、聖霊によって地の果てに至る証しをするように命じられます。その移行期が、8 章から 12 章までです。

そして私たちが見るのは、二人の使徒の回心です。一人は、キリスト教会の迫害者、サウロ、つまりパウロです。彼は、熱心なパリサイ派でしたが、復活の主イエスに出会い、それからイエスがメシアであると宣べ伝える宣教者となりました。そして、もう一人の回心について 10 章以上で見えます。ペテロです。回心といっても、救われるための回心ではありません。これまで、イスラエルのためだけの救いだと思っていたのは、ユダヤ人たちの考えでした。その考えから、異邦人も主が救ってくださるのだという啓示を、ペテロに与えられるのです。彼もイエスを信じているとはいえ、あくまでもユダヤ人の中だけの話だと思っていました。そこから、神が異邦人に対しても救われるということが、示されて行きます。

それは、元々、神が世界に対して持っておられたご計画です。そして預言者たちも、預言していました。しかし、それは終わりの日のはるか遠く、諸国の民が主のところに来ると言うのは、ずっと先だと思っていたのです。けれども、それが聖霊によって今が終わりの時だと示されたのです。

そして、パウロが異邦人への選びの器に選ばれたのが 9 章でしたが、ペテロがその神のご計画

をはっきり知ることは、非常に重要です。なぜなら、ペテロに天の御国の鍵が与えられていたからです。「マタ 16:18-19 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」

天の御国において、異邦人への救いは一つの大きな鍵です。その鍵を使って、異邦人の救いへの戸が開かれます。ペテロにその鍵が与えられています。ペテロが、異邦人コルネリウス一家の救いを目の当たりにすることによって、主が恵みによってすべての人を救われることの証人となり、それが教会のこれからのあり方を決定したのです。

1A 主を求める異邦人 1-8

1B 異邦人の町 1-2

¹さて、カイサリアにコルネリウスという名の人があった。イタリア隊という部隊の百人隊長であった。

カイサリアという町にコルネリウスがいました。カイサリアは、ローマのユダヤ属州の首都です。ヘロデ大王が建てた町で、彼の天才的な建築技術が生かされました。それまでは自然の海岸を使った港がヤッファに造られていましたが、彼こそが、コンクリートの波止場を造ったのです。その他、半円形の劇場、競馬場、宮殿など、驚くべき建造物が今も遺跡で残っています。しかし他のローマの町のご多分に漏れず、偶像礼拝、富、また快樂が詰まった町です。

しかし、ここに伝道者ピリポが既に定住しています。そして後に、パウロがここで幽閉されて、総督や王の前で弁明をします。そして、キリスト教が後に栄え、「教会史」という著作で有名な、エウセビオスという教会指導者が出ます。異教や世の富が満ちているところにこそ、光として輝く証人が必要なのです。

そして、ここは属州の首都なので、総督もここに住んでいました。ピラトもここからエルサレムに過越の祭りに行きました。パウロが裁判を受ける時に、カイサリアに連れて来られたのは、このためです。そしてここから彼は、ローマに囚人として連れていかれることになります。世界への宣教のさきがけの町として、主がお用いになりました。

ここに百人隊長コルネリウスも駐屯していました。ローマ軍はとても規律正しです。「イタリア隊」とありますが、一つの隊が六百人です。六人の百人隊長がいます。コルネリウスはその六人のうちの一人でした。

軍隊とか兵というと、私たちは横暴さをイメージします。確かに、福音書にも、バプテスマのヨハ

ネが兵士に対して、市民からゆすり取らないように戒めています。けれども、百人の兵を統率する百人隊長は、有能な人が付いています。何か戦闘における衝突が起こると、そのど真ん中に入って、指揮しなければいけません。また自分自身が指揮していることが敵に知られないように、他の兵士と変わらない身なりをしていました。上官からの指令を受け、また兵士たちの命令を下す、いわば中間職のような立場にいた人たちです。

とても印象深いのは、新約聖書は百人隊長の信仰深さを書き記していることです。福音書では、使徒の働きを書いているルカは、カペナウムにいた百人隊長のことを描いています。ユダヤ国民を愛して、会堂を自費で建てたりしていました。コルネリウスも同じようなことをしていました。彼のしもべが病に罹りましたが、イエスが触りに行こうと向かうと、驚くべきことを言いました。「ルカ 7:7b-8・・・ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」ことばにある権威を良く知っていました。指揮系統を良く知っていました。主から言われたことに従うというのは信仰の要ですから、百人隊長は信仰を持つことの本質が比較的、分かり易かったのかもしれません。

そして十字架刑の現場にいて指揮を取っていたのは、百人隊長です。主が死なれるまでのすべての光景を見たのが、百人隊長でした。そして、一連の出来事を見て、彼は、「マル 15:39 この方は本当に神の子であった。」目立ちませんが、他のユダヤ人たちよりも先に、イエスが誰かを悟ったのです。さらに使徒の働きの最後、パウロが囚人としてローマに向かう時、責任を取っていたのが、「親衛隊のユリウスという百人隊長」とあります(27:1)。彼がパウロに好意を持って、良くしてくれたことが書かれています。そして嵐の時、船の指揮をパウロに後半部分で任せています。

私たちキリスト者が、信仰が軍人と相いれないと思っている、幼い考えがありますね。私は、クリスチャンの友人で軍人、元軍人を何人も知っていますが、その多くがへりくだっています。なぜか？主を主とすること、権威の下にいることをよく知っているからです。一般の人たちは、自分を無にして、自分を従わせるということが、人権や自己選択の名の下で行ってこなかったのに比べると、イエスを主とするということが、すんなりと分かるのではないのでしょうか。

2B 聞かれている祈り 3-4

² 彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた。

コルネリウスは、異邦人でありながら、ユダヤ人の神を敬っていました。「敬虔な人」とありますが、「神を恐れ」とあります。ローマには数々の神がありますが、それは汚れや不道徳が付きま

といいます。そうした多神教的な環境に嫌気が差していました。そういうものから離れ、天地万物を造られた、聖なる神を敬いたいと思う人たちのことです。しかし、ユダヤ教に改宗するまでは行きません。改宗するのは割礼をまず受け、それから様々な手続きがあります。けれども、そこまでは行かず、ユダヤ人の神を敬う人々です。また、施しもユダヤの民によく行っていました。また、神に祈りをいつも献げたとあります。外側にいるけれども、それでもイスラエルの神とつながっていると
言う感じです。言い換えると、敬っているけれども、内には入ってこない、あるいは入れさせてもらえていない人々です。

それから、神を恐れているのが、「**家族全員とともに**」とありますね。あとで、聖霊のバプテスマを受けるのも、一家そろって受ける姿を見ます。ピリピへの宣教でも、看守の一家が信じます。私たちはとかく、個人の回心だけを見てしまいますが、聖書にはこのように、家族ごとの回心、集団の回心も見ることができます。世界宣教においても、部族の酋長が信じると、その部族全体が信じるということも見ます。

³ ある日の午後三時ごろ、彼は幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。その御使いは彼のところに来て、「**コルネリウス**」と呼びかけた。⁴ 彼は御使いを見つめていたが、恐ろしくなって言った。「主よ、何でしょうか。」すると御使いは言った。「あなたの祈りと施しは神の御前に上って、覚えられています。」

ユダヤ人の祈りは、午前 9 時と午後 3 時があり、またその間の正午もあります。コルネリウスは、ユダヤ人の習慣にならって、午後三時頃祈っていました。彼はこれほど、神を追い求めていました。その彼に御使いが現れました。このように、神は、ご自分を求めている人に真実であられます。前回は、エチオピアの宦官が真理を求めているので、神がピリポを遣わされました。今回は、ペテロを神が、その求道の心に応じて、遣わしてくださるのです。求道の思いを持っている方々に、主が現れてくださることを祈りたいと思います。

3B 人の派遣 5-8

⁵ さあ今、ヤッファに人を遣わして、ペテロと呼ばれているシモンという人を招きなさい。⁶ その人は、シモンという皮なめし職人のところに泊まっています。その家は海辺にあります。」⁷ 御使いが彼にこう語って立ち去ると、コルネリウスはしもべたちのうち二人と、彼の側近の部下のうち敬虔な兵士一人を呼び、⁸ すべてのことを説明して、彼らをヤッファに遣わした。

コルネリウスは、ペテロに人を遣わすことについて、御使いの指示にきちんと従いました。彼は、天からの啓示に従順になり、二人の部下を遣わします。そして、もう一人、神を敬う兵士も遣わします。神を敬っている者でなければ、この状況は到底理解できないからです。

2A ペテロへの指示 9-16

1B 祈りの時間の幻 9-10

⁹翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈るために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。¹⁰彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。ところが、人々が食事の用意をしているうちに、彼は夢心地になった。

カイサリアからヤツファまでは、約 60 ㎞の道のりです。徒歩で動いているので、二日はかかりません。ペテロのほうは、先ほど話した日に三度の祈りの中で、正午の祈りを献げている最中でした。「屋上に上った」とありますが、平らな屋根です。以前、ガリラヤで中風の人を担ぎこんだ人々が、屋根から降ろしたという話がありましたね。平らだからこそ、そのようなことができます。今も、エルサレムの旧市街に行きますと、城壁巡りができますが、そこから見えるのは、平らな屋上です。

2B 食物規定で汚れた動物 11-12

¹¹すると天が開け、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来るのが見えた。

¹²その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。

主は、ペテロの空腹時を使って、幻をお見せになりました。何か食べたい時に、「これだけ、食べ物がある。屠って食べなさい！」と言われました。この敷布は、船の帆のような大きなものだそうです。市場で物を売る時に使われるようなものだそうです。異教の町カイサリアでは、よく見かける光景なのかもしれません。

3B 命令を拒むペテロ 13-16

¹³そして彼に、「ペテロよ、立ち上がり、屠って食べなさい」という声が聞こえた。¹⁴しかし、ペテロは言った。「主よ、そんなことはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」

モーセの律法のレビ記 11 章にある、食物規定に触れる箇所です。食べてよいのは、反芻する四つ足動物で、反芻し、蹄が分かれて、割れているものです。牛や羊はそうでしょう。けれども、豚は汚れていますね。反芻しないからです。犬も汚れています、蹄が分かれていないからです。そして地を這うものは、汚れているとされます。蛇であるとか、モグラもそうです。

そのようなものが見えて、屠って食べなさいと命じられるのですが、ペテロは、とても矛盾したことを言います。「主よ、そんなことはできません。」主よ、と呼んでいるのに、「そんなことはできない」と、歯向かっているからです。主と呼ぶのであれば、「はい、わかりました」という返答しかできないはずです。しかし、できないと言っているのです。彼は、他にも少なくとも二回、この過ちを犯しています。イエスが、ご自身が十字架につけられることを語られたら、「主よ、とんでもないことです。そ

んなことがあなたに起こるはずがありません。(マタ 16:22)」と言いました。そして、主が彼の足を洗われた時も、「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。…決して私の足を洗わないでください。」と言っています(ヨハ 13:6,8)。

その理由が、そのような清くない物、汚れた物を食べたことがないということです。習慣というものが、実に、主ご自身の命令を蹴散らすほどの力を持っているということです。主の命令は、聞いてそれに応答するという、生きた信仰の中で守られていくものです。それを、いつの間にか、同じ神の律法をもって、自分を守るための壁にしてしまうのです。

主が食物規定を設けられた理由が、レビ記 11 章の最後にあります。「11:44 あなたがたは自分の身を聖別して、聖なる者とならなければならない。」イスラエル人がこの規定を守ることによって、自分たちが神の命令に従う民であり、神に別たれた聖なる民なのだということを知らせました。また、他の箇所では、「申 7:3 また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」偶像を家に取り入れて、偶像礼拝をすることのないように、結婚することも戒められていました。

このようにして、国民生活が主のみを神とする、聖別された民となるように神が配慮されました。けれども、それが神の恵みによる選びではなく、自分たちの肉の誇りとなっていきました。イエス様が、「真理があなたがたを自由にします。」と言われた時に、「ヨハ 8:33 私たちはアブラハムの子孫であって、今までだれの奴隷になったこともありません。」と言っています。自分たちがエジプトの奴隷状態にあったのをすっかり忘れてしまっていますが、自分たちのありのままの姿を見ることが出来なくなったのです。

そして、「ユダヤ人に生まれてさえすれば、そのまま天の御国に行く。」と思うようになります。ユダヤは自動的に御国に入ると思いました。そのことに、バプテスマのヨハネが、厳しい言葉を残します。「ルカ 3:8-9 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言うておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

これは、キリスト者も同じ過ちを犯してしまうのではないのでしょうか？自分たちは聖別された民だから、世の人たちは堕落していて、関わらない方がいいということです。もちろん罪とのかかわりはさけるべきです。しかし、イスラエルの民は、世界の証人になるように召されていました。世界の光になるように召されていました。自分たちに神がおられることを、諸国の民に示していく使命、いわば宣教の使命があったのです。キリスト者も、世から聖別された民であると同時に、世において光として輝く、宣教の使命を負っています。

3A 使者の受け入れ 17－23

1B 御霊への従順 17－20

¹⁷ ペテロが、今見た幻はいったいどういうことだろうか、と一人で思い惑っていると、なんと、コルネリウスから遣わされた人たちがシモンの家を探し当てて、その門口に立ち、¹⁸ 声をかけて、「ペテロと呼ばれているシモンはここに泊まっていますか」と尋ねていた。

シモンの家は海辺にあるとしか聞いていなかったのので、探し歩いたのでしょう。ちょうど、その直前に、ペテロは幻のことで思い惑っていました。

主の行われている面会ですね。アレンジメントです。主は、両方から啓示されます。サウロの回心もそうでした。アナニアにも語られ、彼を受け入れ、手を置き、それで聖霊に彼が満たされることを示されました。パウロにも、同じように示されました。しばしば、教会の世界で、人々が一方的に、「これこれが示されました」と言ってきますが、主の導きなら両方に示してくださいます。

¹⁹ ペテロは幻について思い巡らしていたが、御霊が彼に言われた。「見なさい。三人の人があなたを訪ねて来ています。²⁰ さあ、下に降りて行き、ためらわずに彼らと一緒に行きなさい。わたしが彼らを遣わしたのです。」

今度は、ペテロは従順に従っています。御霊が、「ためらわずに彼らと一緒に行きなさい」と言われたのです。御霊が言われたからという理由だけで、行動に移しました。私たちがどれだけ、「主が言われたから」という理由だけで行動しているのでしょうか？ どうしても、前に示してほしいと私たちは願ってしまいますが、主は、一步一步、示されます。ですから、分からずとも、その一步を踏み出すのです。そのことによって、次の一步をお示しになります。

2B 異邦人の受け入れ 21－23

²¹ そこでペテロは、その人たちのところに降りて行って、言った。「あなたがたが探しているのは、この私です。どんなご用でおいでになったのですか。」²² すると、彼らは言った。「正しい人で、神を恐れ、ユダヤの民全体に評判が良い百人隊長コルネリウスが、あなたを自分の家に招いて、あなたから話を聞くようにと、聖なる御使いから示されました。」²³ それでペテロは、彼らを迎え入れて泊ませた。翌日、ペテロは立って、彼らと一緒に出かけた。ヤッファの兄弟たちも数人同行した。

彼らの話を聞いて、ペテロは彼らを泊ませました。ここで大きな壁が崩れています。ユダヤ人の家の中に、異邦人が入ったのです。これは、タブーです。あってはならないことです。けれどもすでに、皮なめし職人の家ですから、ユダヤ人の律法に従えば、汚れていると言えばそうです。異邦人は、ますますハードルが高かったのです。こうやって、次第にペテロの心の壁が崩されています。

そして、翌日、ペテロは立ってでかけますが、兄弟たちも数人同行しています。ペテロは賢いです。前例のないことをこれから行おうとするのに当たって、証言をしてくれる人たちが必要だったのでしょう。この節から、再び次回、学んでいきたいと思います。